

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

北海道阿寒郡鶴居村

○学校名

鶴居村立鶴居中学校

○学校のURL

<http://academic1.plala.or.jp/turuite/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】2学級、【合計】5学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】60人（平成26年11月26日現在）
（内訳：1年生22人、2年生22人、3年生16人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26年度人権教育研究推進校事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

- ・自主的で向上心に富む生徒に
- ・心身ともに健康でたくましい生徒に
- ・勤勉で責任を重んずる生徒に
- ・人間性豊かで互いに磨き合う生徒に

【人権教育に関する目標】

- 「自己有用感を高め、思考力、判断力、表現力をもった生徒の育成」
- ・自他の人権を尊重した社会づくりの担い手であることを自覚する生徒
 - ・多様な人々と豊かにつながり、共に生きる生徒
 - ・本来もっている能力を発揮し、自己実現を目指す生徒

○人権教育に係る取組一口メモ

自他の人権を尊重しようとする意識・意欲・態度及び実践力を育む指導を実践する。

○人権教育にかかる取組の全体概要

○生徒指導の機能を生かした指導方法の工夫

授業では「自己決定の場を与える」、「自己存在感を与える」、「共感的人間関係を育成する」という生徒指導の機能を生かした授業づくりを進めている。

○各教科等の指導と体験活動の関連を図った指導の工夫

各教科等では、指導内容が自己肯定感や生命尊重、自他の尊重、多様性への理解等に関する場合、道徳の時間との関連を図るよう指導計画に位置付け、生徒の道徳的実践力の育成を図っている。

3. 特色ある実践事例の内容

◆「赤ちゃんふれあい体験」を踏まえた道徳の時間の授業実践の取組

(取組のねらい、目的)

「円滑な人間関係づくり」や「共感的な他者理解」の実現を目指し、「自己有用感を高め、思考力、判断力、表現力をもった生徒の育成」を研究主題とし、人権尊重の視点を取り入れた道徳の時間の指導の充実に取り組んだ。

(取組を始めたきっかけ)

本校の生徒は自分のよさに気づき、他者との関わりの中で自他を尊重しようとする感情が育まれているが、「自分に自信がもてない」「自分をうまく表現できない」など、自己を否定的に捉える傾向が見られる。また、他者とのコミュニケーションに消極的で不安を感じていたり、人間関係を構築したりすることが苦手な生徒もいることから取組を始めた。

(取組の内容)

生徒は家庭科での「赤ちゃんふれあい体験」を通して、生命の尊さ、子育ての苦労や喜びなどに気付くことができたことを踏まえ、家族が温かい信頼関係や愛情による絆で結ばれているとともに、家族の一員であることの自覚や家族が協力することの大切さについて考え、道徳的実践力を高めることができるよう道徳の時間において「家族愛」を扱った授業を行った。

- I 主題名 「家族愛」 内容項目 4— (6)
- II 資料名 「誰かのために」(「私たちの道徳」 p 184～185)
- III ねらい 母親が子を思う深い愛に気付かせ、家族の一員としてよりよい家庭生活を営もうとする道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を養う。
- IV 主題設定の理由
 - 1 ねらいとする道徳的価値
人間は、過去から受け継がれてきた生命の流れの中で生きている。そのため今、自分が在るのは祖父母や父母のもと、かけがえのない子供として深い愛情をもって育てられたことに気付かせることが大切である。このことから、自分の成長を願い無私の愛情で育ててくれた父母や祖父母への敬愛の念を深めることが必要である。
しかし、中学生の時期は自我意識が強くなり、自分の判断や意志で生きていこうとする自律への意欲が高まってくる。そのため、父母や祖父母の言動やしつけに反抗的になりがちである。
指導に当たっては、赤ちゃんとの交流体験をもとに、これまでの自分と家族とのかかわり、家庭生活の在り方が人間としての生き方の基礎であることを十分に理解できるようにする。

2 生徒の実態

事前アンケートから、多くの生徒が「自分の親に感謝をしている」と回答し、とりわけ、「感謝の気持ちをしっかり伝えているつもり」と回答した生徒が多く、日頃から父母に対する敬愛の念をもっていることがわかる。

一方で、「自分の親へ感謝を感じることはない」と回答する生徒もおり、親に対して心無い言葉をかけたり、感謝しなければならないと頭では分かっているけれども、自分の気持ちを素直に表現したりすることできない生徒もいた。

3 資料について

本資料は、余命3か月と診断された患者とその家族の生き方から家族について考えることができる内容になっている。資料を読み、親の子を想う深い愛に気付くことで、自分を支えてくれている親へのさらなる敬愛の念やかけがえのない自分に気付かせていく。なお、授業の終末にユーモアのある文体の中にも母親への愛情が感じられる別資料「菊次郎とサキ」の一節を教師が範読した。

4 本時の展開

	主な発問と予想される生徒の反応 (○基本発問 ◎中心発問)	留意点、■ 評価
導入	<p>アンケートの結果を交流する</p> <p>○「親に怒られた時に素直に聞けないのはどうしてだろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何回も同じことを言うから ・ 言い方が厳しいから 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートの結果をもとに、資料への意欲付けを図る。
展開前半	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料を範読する <p>○「子どもの卒業式まで生きてほしい、最後の力を振り絞ってお弁当を作った母親の姿をどう思いますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもに対する愛情がすごい ・ 苦しなかったのだろうか ・ 子どもたちはうれしかったと思う <p>◎「母親が作ってくれた最後のお弁当を食べた子どもはどうして切ない気持ちだったでしょうか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ もったいない気持ちになった ・ もう食べることができないから ・ 体に無理をしてもお母さんが作ってくれたから ・ お母さんがいなくなってしまうことを考えたから 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体場で交流する。 ・ 資料を読み、全て子どものことを想っての行動だということを理解し、子どもへの愛に気付かせる。 ・ ワークシートに記入させる。 ・ 話し合い活動→発表
展開後半	<p>◎「あなたが親からの愛を感じるのはどんな時ですか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 悩んでいると励ましてくれるとき ・ いつも見守っていてくれているとき ・ 自分のことをよく認めてくれるとき 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭科の学習と関連していることを想起させる。 ■ 親が子を愛する気持ちに気づき自分の生活と照らし合わせて考えている。
終末	<p>教師の説話</p> <p>「菊次郎とサキ」を一部抜粋して読み、ユニークなやり取りの中にある親子の愛について触れ、説話する。</p>	

【道徳の時間「振り返りシート」の自己評価】		4点満点
項	目	評価
・	自分の正直な考え方や思いを、言ったり書いたりできた。	3.60
・	資料から学んだことを生かして、普段の自分の生活を振り返ることができた。	3.46
・	自分と人の考えの違いや似ているところがわかった。	3.60
・	今日の学習で、これからもっと頑張っって自分の心を成長させたいと思った。	3.46

(取組の主体や実施体制)

本校では、校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、全教員で人権教育を推進している。「人権に関するアンケート」の結果から、全学年において自尊感情が低いことから、家族や友達とのかかわりの中で生きていくことの大切さについて、系統的に学習できるよう年間指導計画を工夫している。

(取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

学習内容の系統性を重視し、自他はかけがえのない存在である意識を高めるためのキーワードを「家庭、家族」として第1学年では「自分が家族の中でどのような立場にあるのか」、第2学年では「家庭生活を営む上で自分はどのような役割を果たせばよいか」、第3学年では「家族の一員としての自覚をもって積極的に協力していくこと」を学習の柱として授業づくりを行った。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

家庭科では「赤ちゃんふれあい体験」を実施し、自分の成長に家族の関わりが深く影響していることについて考えさせることができたが、道徳の時間では、家族愛や家族の一員としてよりより家庭生活を営もうとする意欲を高める学習活動を工夫する必要がある。



(課題に対する解決方法)

道徳教育の全体計画や年間指導計画を家庭科との関連から改善する。その際、教科の学習や実際の体験を生かし、様々な考えが交流できるよう言語活動を工夫する。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

「赤ちゃんふれあい体験」で、赤ちゃんとのコミュニケーションを自分なりに工夫し、積極的にかかわることを通して自分を産んでくれた親への感謝、育てるときの苦労などについて理解することができた。また、赤ちゃんのお世話をしたり、一緒に遊んだりすることを通して、人の気持ちを理解し、多様な人々とのつながりを実感することができた。



(取組が効果を上げた実際の事例)

道徳の時間では、家族について考える際、「赤ちゃんふれあい体験」を想起させることで、自分はかけがえのない子供として深い愛情をもって育てられたことに気付かせ、家族の中での自分の役割などについて深く考えさせることができた。

家庭科の時間では、幼児と触れ合う直接的な体験「赤ちゃんふれあい体験」を設定することで、幼児への関心を深め、幼児とのかかわり方を工夫させるとともに、幼児も含め家族とのコミュニケーションを深める方法について深く考えさせることができた。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

家庭科の学習後に道徳の時間の学習を行うことで、家族の一員としての在り方について、生徒の道徳的価値に深まりが見られた。このことから、生徒が人間としての生き方や在り方など、「主として自分自身に関すること」を深く追究することができるよう、各教科等と道徳の時間の実施時期を連動させるなどして年間指導計画を見直した。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

道徳の時間のワークシートでは、「親の愛情は子供が想像しているよりもはるかに大きいものだ」と実感した。これから親に恩返ししたい。また、自分が親になったとき、子供に最大の愛情を注ぎたいと思う。」などの感想が多く見られたことから、本実践は、生徒の道徳的価値の自覚を深めることになったと考えられる。

(保護者や地域住民からの反応)

地域の保育園と連携を図り、「赤ちゃんふれあい体験」の内容を学校だより等で保護者や地域住民に発信しており、保護者や地域住民も赤ちゃんとのふれあいを通して成長する生徒の姿や心の変容が見られたことを実感しており、本実践は高い評価を得ている。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

内容項目2-(5)「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心もち謙虚に学ぶ」、4-(3)「正義を重んじだれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める」などの内容項目について、年間指導計画に効果的に位置付け、人権意識の醸成を図る必要がある。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

鶴居村立鶴居中学校

「人権に関する生徒アンケート」で明らかになった自己肯定感や自尊感情が低い実態を克服するため、各教科の指導における体験活動を「道徳の時間」と関連づけるなどの工夫をすることにより効果をあげている。例えば、事前に行った家庭科での「赤ちゃんふれあい体験」で赤ちゃんを抱いたりあやしたりした体験を、「道徳」の「家族愛」の学習に結びつけることで、生徒に自分もかけがえのない存在として育てられたことに気付かせたり、家族と自分の関係をより深く捉えさせたりしている。

授業後の「親の愛情は子供が想像していたよりもはるかに大きいものだ。」「自分が親になったとき、子供に最大の愛情を注ぎたいと思う。」等の感想はその効果を示しているものと言える。「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果」は、校種が上がるにつれて人権学習が座学的なものにとどまる傾向が高いこと示しているが、その状況を改善するためにも参考にしたい事例である。